

『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』 ～ 『対話を成り立たせる』 ～

2023年6月14日 本郷3丁目で、筆者の母校である島根県出雲市の出雲高校の同級生 佐藤典久氏(日本産業医支援機構 代表取締役社長)と昼食をする機会が与えられた。筆者は、1969年4月に開設された理数科の一期生である。【理科や数学の学習を中心とした専門教育を行い、将来科学技術の研究・開発や医療の進歩等に指導的な役割を果たす人間を育てることを目標としています。】とある。筆者の故郷は、人口約40名の出雲市大社町鵜嶋である。隣の鷺浦地区と合わせて、『鵜鷺(うさぎ)』(小学校 & 中学校は廃校;画像)と呼ばれている。713年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。

筆者は、2014年『神在月シンポジウム ～ がん治療とその後の生活 ～』(出雲市)での講演『医師の2つの使命 ～ 純度の高い専門性と社会的包容力 ～』で帰郷した。『八百万の神々が全国から出雲に集う神在月にあわせて、地域の皆様を対象として、健康・医療について語り合うシンポジウム』と謳われていた。講演後は、区長をはじめ村民の方々と、夕食を共にしながら、『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』を語った。翌年2015年に、鵜嶋小学校の体育館で、『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』シンポジウムが開催されたものである。そして【東京いずもふるさと会会報『出雲』第9号(2015年)の特別寄稿『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』】(画像)の機会が与えられたことが、今回鮮明に思い出された。

1894年箱根の『夏期学校』で、内村鑑三(1861-1930)が『誰でも実現可能な生き方』を語ったのが『後世への最大遺物』(内村鑑三著 岩波文庫 1908年)に繋がった。内村鑑三の『だれとも対話を成り立たせる語り口』は、故郷の原景と共に筆者の『がん哲学外来』の原点でもある(画像)。『日本が嘗て生み得た人物中最大の人物』として『内村鑑三・新渡戸稲造(1862-1933)』を学ぶ日々である。

6月14日午後は、順天堂大学保健医療学部 診療放射線学科の2年生の『病理学概論』と『がん医療科学』の講義を担当した。『がん医療科学』では、筆者の『がん細胞から、学んだ生き方 ～ 「ほっとけ 気にするな」のがん哲学』(へるす出版)の第5章の【『クオリティ・オブ・デス』を考える】を音読しながら進めた。



# がん哲学外来

メディカルタウンを追いもとめて

樋野 興夫

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授

